

## 授業科目の概要

(保健医療学部 鍼灸学科)

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	科学的思考	基礎ゼミナール	本演習は、新入生が大学生としての役割を身につけることができるように、学生を支援することを目的としている。具体的には、学生を少人数のグループに分けて担当教員に配属し、(1)大学での学習に必要で、かつ高等学校までの教育において取得すべき内容の教育、(2)レポート・論文の書き方や文献の探し方、(3)大学生に求められる一般常識や態度、(4)専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育などについて、ディスカッションを交えて演習を行う。(5)実践現場を早期に体験するため病院見学を行う。	複数教員による 共同担当
		学習方法論	学習方法論は、高等教育機関で学習するための導入教育としての位置づけで教授する。大学生として能動的に学習できるように基本的な学習方法の修得だけでなく、自主的な問題解決能力の基礎を養う。特に「聴く、読む、調べる、整理する、まとめる、書く、表現する、伝える、考える」といった能力を修得するために、講義ノートの取り方・教科書の読み方・文章作成の方法・要約の方法・図書館における情報収集・インターネットによる情報収集・情報の整理・レポートや論文の作成・プレゼンテーションの方法などの技法について学習する。	
		情報処理	この授業では、コンピュータの初心者がコンピュータを利用するうえで必要となる基礎知識およびコンピュータの基本操作の習得を目標とする。コンピュータの基礎すなわちハードウェアに関する基礎知識とソフトウェアを利用するための基礎知識を学ぶと共に、オペレーティングシステムや日本語ワープロソフト・表計算ソフトなどのアプリケーションソフトの操作を行う。具体的には(1)テンプレート使用による各種文書の作成や図表を用いたビジュアルな文書の作成(2)初歩的データベース構築(3)プレゼンテーション用のスライドや発表資料の作成(4	
		生物学	ヒトは生物であり他の生物に囲まれ依存しながら生きている。生物の生命現象や、普遍性を理解することが生物学の目的である。具体的には、(1)受精・発生・成長による形態の変化と生命の持続、(2)物質代謝における生命の持続、(3)エネルギー代謝による生命の持続、(4)生体機能の停止と形態の崩壊など、細胞について理解する。また、生殖によって自己の属する種と同じ種の個体を繁殖させ、種の形質を保存して系統を維持する遺伝の仕組みについて理解する。	

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群		物理学概論では、物理学の重要な法則と概念を典型的な物理現象の例を通じて具体的に理解し、いろいろな法則や概念を諸法則の相互関連を認識しつつ系統的に把握することを目的とする。具体的には、自然現象を定量的に理解するために必要な数学的事項、物体の運動を理解する力学、波の性質、熱力学とエントロピー、電場、電流と磁界、電磁誘導と電磁波、光の性質、相対性理論、原子と原子核などについて、基本的な知識を学習する。	
	生化学	生化学では、①「生命の維持と仕事」細胞・エネルギー・熱・pHなどの基本的な事について ②「栄養素」（糖質・脂質・タンパク質・ビタミン・電解質・水・核酸）についてとそれらの代謝 ③「酵素による代謝」体内の代謝のほとんどは酵素反応である ④「血液による恒常性」 栄養素の運搬・ホルモンの運搬・血液ガス老廃物の運搬・熱の運搬・pHと浸透圧について ⑤「血液と免疫」血液の組成と働きのメカニズム ⑥「臓器の生化学」肝臓・膵臓・胃・小腸・腎臓・神経・筋肉などの代謝の特異性について学ぶことで、栄養素が細胞・臓器を構成し	
	食品栄養学	食品栄養学では栄養素の働きに関する知識を得、それら栄養素を含む食品と働きについて学ばせ、(①栄養素の体内での働き ②エネルギー供給栄養素とそれらを含む食品 ③身体を造る栄養素とそれらを含む食品 ④代謝調節栄養素とそれらを含む食品 ⑤機能性非栄養成分) これら栄養素を身体に取り込む「消化と吸収」について学ばせ、さらに、ライフサイクル(正常一健康時に加えて妊娠時期、成長期、高齢期など)や運動選手(アスリート)や特殊な状態での食事と食生活について講義する。また、「食生活と疾病」を生活習慣病(高血圧・肥満・糖尿病・	
	統計学	本講では代表値や相関と回帰を学ぶことで医学データのまとめ方や確率の基礎・分散分析などを理解する。データと標本調査について学習し、統計学的推定と検定、割合・率・比・リスクについて学んだあと、リスク比、オッズ比、オッズ差の信頼区間へと学習を進める。相関関係と因果関係について学んだあと検定・推定と標本数の関係を理解することで、研究の妥当性、コントロールの必要性、治療の効果、疫学研究から因果関係を調べるための考え方を身につける。	

科目 区分	授業科目名	講 義 等 の 内 容	備考	
教養科目群	人間理解と社会	生命倫理学	<p>(概要)            生命倫理学は「生命とは何か」というきわめて根元的な問いを対象とする学問であり、ヒトのみならず生物全体を含むものである。            現代社会や医療分野で問題となっている事例を取り上げ、生命の倫理について考察し、個々の学生が自らの生命観を育むことができるように教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
		哲学	<p>(概要)            はじめに哲学の基礎として、「世界、人間、神」について哲学的に考えることを学ぶ。著名な哲学者らが、それらについてどのように考えてきたかを考察し、それらへの理解を哲学的に深めるとともに、彼らにある根本や全体から考えるといった哲学的思考方法の基礎を学び、次ぎに東洋哲学と西洋哲学の特色へと進む。</p> <p>(オムニバス形式／全15回)</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	人間理解と社会	心理学	心理学を学ぶことで心の仕組みと働き、さらには人間理解を深め、多方面で激動する現代社会の中で、先見性と方向性をもった活動をするための礎の確立を目指す。心理学の基礎的な理論や概念を学習し、さらにそれを実証するための研究法も学ぶ。さらに認知心理学分野、学習心理学分野やカウンセリング、ストレス、犯罪心理、家族心理、社会心理などについても具体的に学習する	
		東洋思想論	現代社会を主導している思想は、民主主義や人権をはじめ、その大半が西欧近代の所産にほかならない。しかし同時に、その限界も明らかになりつつある。このような背景において東洋思想を学ぶ意味は、ただ単に過去を振り返ることにあるのでもなければ、西欧近代をやみくもに否定することにあるのでもない。人類の未来を展望する新たな思想を、東洋という領域のなかに発見し、再生利用することにある。本講義ではインドと中国を中心に、東洋の伝統思想を探求し、現代社会の諸問題に対し、何を提起できるか考察していく。	

科目 区分	授業科目名	講 義 等 の 内 容	備考
教養科目群	人間理解と社会	<p>(概要)</p> <p>医療と宗教の関係は、古来は融合したものであったが、近代科学の確立以降、医学は実証されないものを排除してきた。しかし今、健康は単に疾病の存在しないことだけでなく、霊性 (spiritual) の健全性もうたわれ、宗教は医療において無視しえないものとなっている。人間の本質を探るアプローチの一つとして、宗教の輪郭を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	人間理解と社会	東洋史学	東洋史学では、中国の歴史を中心に日本周辺地域全般の歴史を概説する。特に医学を学ぶ者にとって中国医学史の概要を知ることが不可欠であろう。そこで、有史以来の医術、薬物処方から黄帝内経医学の成立と展開を経て現代中国の中西結合の医療に至るまでの歴史を学び、あわせて、中国医療の影響を深く受けたわが国の医療文化の歴史を学ぶことによって、広い視野を涵養することにつとめる。さらに日本周辺諸国との国際関係の理解にも役立つ。	
	人間理解と社会	社会学	社会学を学ぶ目的は、変化してゆく社会の動向を的確に把握し、社会全体をより良き方向へと導く方法を学ぶことにある。この観点に立って、現代日本社会が抱える様々な問題を考察し、社会全体の問題に常に対応できる力を涵養する。具体的には、心身不調・うつ・自殺・人格障害等を社会学の立場から考察する。さらに近年問題となっている児童青年期に起こる学習障害や注意欠陥多動性障害を取り上げ、その原因や問題点を考察する。このような現象は社会構造によって影響される場合が多く、これらの問題点を明らかにし、かつ自らの問題として考える力を養	
	人間理解と社会	法学概論	社会と法と法学について一般的な知識を学び、法とは何か、社会と規範また規範と法則について学ぶことで社会規範としての法の本質を学習する。また法と裁判として民事裁判や刑事裁判などの裁判制度、裁判の関係者について学ぶとともに裁判の基準としての制定法・慣習法・判例法、または条理といった法源についても学ぶ。次いで日本国憲法の人権と統治機構の2分野のうち主眼を人権に置き講義をおこなう。具体的には、憲法とは何か、人権、憲法による人権保障の意義、人権主体、表現の自由、人身の自由、財産権、社会権を内容とする。	

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	人間理解と社会	社会福祉学	社会福祉の発達を社会環境の歴史的変化との関連で捉え、社会福祉諸法の概要をその成立根拠をふまえながら理解する。また、わが国の社会福祉の特徴や問題点、福祉サービスの現状を学習すると同時にその活用法について実生活との関わりの中で理解する。さらに、少子高齢化の進展をはじめ社会福祉を取り巻く環境が近年大きく変化するなかで、今後の社会変動と社会福祉制度・活動の動向について考える。福祉の動向・課題について関心をもち、自らの考えを持ち行動する態度を養うため、新聞記事等から事例を示し考察する。	
		英語Ⅰ（初級）	英語Ⅰでは、単語・熟語・慣用句の知識を含む語彙力や、文意を正確につかむ文法力を養い、日常生活で目にするようなレベルの英文を読んで理解する力の習得を目的とする。また、未知語の推測や背景知識、文化的背景の違いに関する知識などを活用して、文章の概要や要点を速く正確に読み取る技術や読解力を養う。文章中のキーワードを頼りにして速読を行い、書き手の意図を速く正確に捉える読解力を養う。	
	健康科学と語学	英語Ⅱ（中級）	英語Ⅱでは、英語Ⅰで獲得した英文読解の知識や技術をさらに発展させることを目的とする。さまざまな分野の英文を多量に読むことにより、中級から上級のレベルの英文を速く読んで正確に理解できる力を養う。パラグラフの構成や展開に注意して要点を把握するなど、英文読解に必要な技術にも触れながら、速読・多読の演習を行い、重要な情報を正確につかむ読解力を養う。速読によって得た情報をもとに議論をし、英語Ⅲで行う文章作成能力の基礎を養う。	
		英語Ⅲ（応用）	英語Ⅲでは、情報発信の道具として英語を活用するために必要な、基礎的な文章作成能力を身に付けることを目的とする。基本的な語彙や文法、句型、表現等を再確認しながら、それらを用いて文字で自己表現する方法を学ぶとともに、情報や意見を明確に伝えるため、論理的な文章作成の基礎を培う。また、単に考えをまとめたり、語彙を拡充したりするために、「聞く」「話す」「読む」活動を取り入れ、総合的な英語表現能力を養う演習を行う。	

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群  健康科学と語学	医学英語	<p>医療従事者に必要な英語のコミュニケーション能力を身につけるため(1)コミュニケーションの構成要素について学習させ、(2)臨床現場で患者の主訴等の発話を正確に理解したり、また誤解を招かぬよう患者に指示を伝えたりするために必要となる的確な表現や語彙の選択能力を日本語・英語の相違点を踏まえて修得させる。また、(3)コミュニケーションの重要な構成要素である非言語化情報を汲み取り他者による発話の文脈を把握し的確にその意図を掴み、その上で英語によりの確に自分の考えを表現できるようにするための講義を行う。</p>	
	英会話Ⅰ（初級）	<p>英会話Ⅰでは、日常生活で用いられる定型的・慣用的な表現について学習し、その表現を自由に使えるように基礎的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。日常生活で自然な速度で話される英語を聞き取りその内容を理解する力を養うだけでなく、日常の話題について基本的な英語表現を用いて自由に表現できる能力の獲得を目指す。対話における受け答えだけでなく、自らも問いかけができるような、会話を発展させる能力をも養い、十分な自己表現ができることを目指す。</p>	
	英会話Ⅱ（中級）	<p>英会話Ⅱでは、英会話Ⅰで獲得した技能を向上させ、さまざまな場面における幅広い話題について、対話から自分の意見を明確に発表できる力への発展を目指す。自然な速さの英語を聞き取りその内容を理解し、日本とは異なる文化的背景を把握して、英語を用いて、ある程度まとまった内容の自己表現ができる能力の習得を目的とする。発話の意図を十分に伝え、発展的に会話を続ける技法などを学び、日本や外国の文化・習慣などについても相互に情報や意見の交換ができることを目指す。</p>	
	健康スポーツ科学	<p>本講義では、運動負荷時にはじめて出現する生理現象の固有の変化、長期トレーニングによる器官、組織の構造的変化やそれに伴う運動生理機能の向上、不活動（運動不足）による生理機能低下など、生体の運動適応の過程について、運動生理学、スポーツ科学の観点から解説する。これにより、第1次予防の視点に立って運動が健康づくり、特に生活習慣病予防に役立つ根拠を示す。また、実際の医療やスポーツ科学の現場において広く活用されている「心肺運動負荷試験の基礎理論とその評価法」を学ぶことで、運動の制限因子や呼吸・循環器疾患における運動不</p>	



科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	健康科学と語学	体力トレーニング科学演習	スポーツ（運動）を実施する目的は、健康増進、筋力・持久力向上、ダイエット等、実施する個人によって多種、多様である。本演習では、それぞれの目的に応じた効果的トレーニング方法の原理・原則を解り易く解説しながら、スポーツフィットネス・トレーニングを中心に実践で役立つ授業を展開していく。具体的には、バーベルやダンベルなどのフリーウェイト及びマシン機器を用いた筋力トレーニング種目、エアロビクスダンスなどの有酸素運動トレーニング種目、バスケットボール、サッカー等の球技スポーツや卓球、バドミントン等の軽スポーツを含んだ	複数教員による共同担当
		スポーツ実習	本スポーツ実習では、学生が自らの適性に応じてスポーツ種目を選択できるよう、軽スポーツ、球技スポーツ、ニュースポーツ、ダンスなど多種多様なスポーツ種目を用意し、各種目特性を生かして、「思いっきり体を動かす爽快感」と「プレーを通じて感じる理屈抜きの楽しさ」を存分に経験できるようなゲーム主体の授業プログラムを提供する。その中で、体力のレベルアップや身体動作の向上を図ると同時に、ゲームを自主的に運営する能力を養う。また、スポーツの実践を通じて、学生同士の心の交流や人間関係を育み、生涯にわたり楽しく、計画的にスポー	複数教員による共同担当
学部共通科目群	保健医療	公衆衛生学	個人水準で健康を扱う臨床医学に対して、衛生・公衆衛生学は社会水準で健康を取り扱うので社会医学とも呼ばれる。その範囲は多岐にわたり、健康に影響をおよぼす様々なリスクを同定し、予防活動に結びつける学問である。本講義では「社会に役立つ公衆衛生」を基本として、衛生・公衆衛生学の理論、環境と健康、老人保健、感染症の予防と対策、生活習慣病や難病疾患、免疫、精神衛生、産業衛生、消毒、衛生統計などについて学習する。	
		チーム医療論	医療を行う際には、患者に対する心身両面への適切かつ最善の対応が求められる。この目的に向かって専門領域を異にする種々の職種の人々が関与している。チーム医療論では、これらの人々がチームとして包括医療を行うにあたって、それぞれの役割と機能、責務について理解し、相互の連携の在り方について考えることを目的とする。また、今日のチーム医療のあり方だけでなく、国際的な活動の拡大についても取り上げる。	

科目 区分	授業科目名	講 義 等 の 内 容	備考
学部 共通 科目 群	保健医療研究 法	<p>(概要)</p> <p>保健医療研究法では、研究の意義と方法、EBM (Evidence Based Medicine) の概念などを学ぶ。具体的には①文献検索の実際②論文の種類③論文の基本的構成④研究デザイン⑤データ分析⑥論文のまとめ方および学会発表の具体的方法などを学ぶと共に研究に関する倫理委員会の意義を学ぶ。また、様々な保健医療に関する研究を紹介し、卒業研究に役立てる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
	保健医療 リスクマネー ジメント論	<p>頻発する医療事故の報道により国民の医療に対する不信感や不安は強くなる一方である。医療従事者は「ヒトは間違えるものである」ということを十分に理解したうえで質の高い安全な医療サービスを提供する必要性を理解することが必須である。そこで感染や転倒など事故事例の分析を通してその背景にある原因を理解するとともに事故の再発防止と未然防止に取り組む方法を学習する。あわせて、医療施設で発生するアクシデント事例やインシデント事例を分析し医療現場におけるリスクマネジメントの重要性を学習する。</p>	
	統合医療学	<p>現代医学と伝統医学の両者を包含しながら患者を包括的にケアすることを目指す統合医療の概念を理解させる。まず、統合医療の定義、従来の医療や補完代替医療との違い、統合医療の普及状況、現代における統合医療の必要性について解説する。次に各論として、統合医療を構成する個々の主要な補完代替療法について概説し、それを実際に臨床応用している医療機関の実践手法を紹介する。さらに、現代医科学やEBM (根拠にもとづく医療) の観点からみた問題点も指摘し、現代の医療が統合医療として今後向かうべき方向性について示唆を与える。</p>	
	伝統医学概論	<p>伝統医学概論では、漢方医学の知識を学習する。漢方は中国から伝来して以来約2000年をかけて我が国独自の伝統医学として完成した。本講義の主な内容は漢方医学の歴史、漢方医学の病理学、処方学、診断学である。また、消化器疾患、呼吸器疾患、婦人科疾患、整形外科疾患、高齢者の疾患、ストレス・生活習慣病などを取り上げ、それぞれの代表的な疾患に対する診察、診断、処方、適応と限界、現代薬学との違いなどについて学習する。</p>	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学部 共通科目群	保健医療	公益法人のマーケティング	医療法人や学校法人また社会福祉法人など、多くの公益法人は通常の企業などと違い、非営利法人として公益性とその役割の重要性を大きく担っている。また、公益法人は、会計基準においても企業会計とは異なり、マーケティングや経営手法など企業を代表とする営利法人と異なるアプローチを要請されている。本講義では、公益法人（特に医療法人、学校法人）の経営に不可欠な意思決定や問題解決のために必要とされるガバナンスの仕組みや経営科学的なシステム分析の理論と方法論および法制度に関する基本的な知識を習得することを目的とする。		
		医療コミュニケーション論	医療コミュニケーション論では、患者・家族・医療従事者で構成される医療現場での総合的な諸問題や、組織としての病院における経営や管理などに関する多様な問題を論ずるための基本的な事項を学習する。医療の基礎となる人間・社会理解と医療倫理、リスクマネジメントに対する基本的な心構えおよびコミュニケーションの重要性、全人的医療や良好な医師患者関係の確立の重要性、医療従事者としての自己実現などについて学習する。		
学科 専門科目群	専門基礎科目	構造と機能	人体の構造Ⅰ（運動器系）	人体の構造Ⅰでは、人体の基礎を構成し運動器系の中心的な器官である骨と筋について学習する。骨については、分類・構造・発生などの総論と、それぞれの骨の部位や形態的特徴などを学習する。また、筋については分類・構造などの総論に加えて、それぞれの筋の起始、停止、支配神経、作用などを学習する。これらの理解を通じて、骨と筋が運動系として機能するときどのような連携をなしているか考えるとともに、運動時に重要な役割を果たしている関節や靭帯の形態と機能についても理解を深める。	
			人体の構造Ⅱ（循環・内臓系）	人体の構造Ⅱでは、人体の構造Ⅰに続いて、血液、骨髄、脈管系、リンパ系、消化器系、呼吸器系、泌尿生殖器系、内分泌系などについて学習する。さらに、組織学的構造を学習することにより、微細構造と肉眼的形態との関連について理解を深めることを目的とする。特に、身体の重要な調節機構である内分泌系と人体の構造Ⅲで学習する自律神経系の関連を学習し神経系統が直接に、各臓器を制御する仕組みについても考えることができるように学習する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	構造と機能	人体の構造Ⅲ (神経・感覚器系)	人体の構造Ⅲでは、感覚器系、末梢神経系、中枢神経系について学習する。感覚器系では、外界の情報を受容する器官の構造と機能について学習する。末梢神経系では、感覚器により得られた外界の情報を中枢神経系に送り、中枢神経系の命令を末梢効果器に伝える末梢神経について学習する。中枢神経系では、脊髄や脳の構造について、末梢神経やそれにつながる器官との関連を考慮しながら、知識や理解を深める。	
			人体の構造実習	人体の構造実習では、人体の構造Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで学んだ知識をもとにして、骨・筋、脳・脊髄について人体模型を用いて実習を行い、局所から全体にかけて生体の構造と機能の関連について理解を深める。また、人体模型を用いた肉眼解剖だけでなく、光学顕微鏡を用いた組織学実習も行い、各臓器の肉眼的構造がどのような微細構造によって表現されているかについて理解する。	
			人体の機能Ⅰ (動物性機能)	人体の機能Ⅰでは、人体生理機能の基本的概念、個々の現象、分子論的機序などを学び、さらに医学の他の分野を学ぶための基礎知識を修得することを目的とする。生理学の意義、細胞の一般生理学の講義に続き、人体生理学の動物性機能(神経と筋、中枢・末梢神経系、感覚、運動、自律機能と本能行動、高次脳機能)を学習し、医学の他の分野を学ぶための基礎知識を修得することを目的とする。	
			人体の機能Ⅱ (植物性機能)	人体の機能Ⅱでは、主として生命維持に必要な各臓器の機能がどのように統合的に調節されているかを学習する。消化、呼吸、排泄、循環、体温などの植物性機能を系統的に学習し、その多くが生体に外乱が加わっても生体の内部状態を一定に保つフィードバック機構と外乱に対して予測的に内部状態を制御する予測制御機構であることを学習する。また、生命維持機能の解明がホメオスタシス維持機構の解明に他ならないことを理解する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	構造と機能	人体の機能実習	人体の機能実習では、生理現象の観察を通じて、得られたデータの処理・解析から生体機能の総合的理解、体系的知識の獲得を目的とする。「呼吸と循環の計測」、「脳波」、「感覚-運動系の統合」、「心電図」、「ヒトの誘発筋電図」などの実習を通じて、講義で修得した知識を、実験を通じて更に具体的、体験的に理解し、臨床医学においてどのようにその知識が用いられているかを理解する。	
		基礎運動学	基礎運動学	身体運動の評価・治療技術に必要な運動学に対して、骨学、筋学、関節学、神経学など運動器と感覚器の構造と機能、力学、運動の法則、運動の中枢制御、栄養とエネルギー代謝などの基礎を踏まえ、骨の構造と運動、関節構造と運動、筋の力学的特性、神経機構と運動・姿勢制御など、四肢・体幹における運動、動作、姿勢の分析、運動の発達、運動学習など身体運動の理解と治療技術に対する基礎知識を学習する。そして、運動、動作、姿勢を観察・分析した結果に対し、専門用語を用いて表現できることを目的とする。	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害と予防	感染管理学	感染管理学では、医療施設、介護施設、在宅ケアなどにおける全ての人々を感染から守るために、感染予防と管理の意義・目的・方法について学習する。感染症の概要を学び、感染管理の現状および動向について理解し、組織の効果的な活動のあり方について考える。また、感染管理と医療経済の問題や、感染に関わる人権などについて学習する。さらに、感染症発生時の対処方法を、リスクマネジメントとしてとらえ、感染制御活動の意義についても理解する。	
		疾病の病因と病態総論	疾病の病因と病態総論	疾病の病因と病態総論は疾病に関する基本的概念を扱うことから、医療に従事する者にとっては欠くことのできない学問である。したがって本講義では、まず病理学の意義ならびに病態を捉えるための病理学的手法について学習する。次いで人の疾病を理解するための基礎となる発生機序、経過、予後などの疾病の成り立ちについて学習する。さらに様々な臓器や組織に共通してみられる病変である退行性病変、循環障害、進行性病変、炎症、免疫異常、腫瘍、先天性異常などについて、総括的に学習する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害と予防	(概要) 疾病の病因と病態各論では、疾病の病因と病態総論で学習した様々な病変をもとに、臓器ごとの病変を個体レベルのみならず分子レベルでも捉え、各疾病の病態、特異性など病理学的特徴を学習していく。また、運動器の病理学についても併せて教授する。  (オムニバス方式／全15回)	オムニバス方式	
			疾病の病因と病態各論	疾病の病因と病態総論・各論で学んだ知識にもとづき、主要な病変について病理組織標本を用いた検鏡実習を行う。正常な組織標本と病理組織標本を比較、観察することにより、疾病の組織レベルの変化が個体にどのような変化をもたらすかを視覚的に捉え、学習していく。さらに組織の変化は細胞の変化であるといえることから顕微鏡を用い、一つ一つの細胞の変化を詳細に捉えていく。また組織の病変は細胞のみならず蛋白・遺伝子レベルでの変化であるともいえ、これらを理解するための病理学的手法の実践についても実習を行っていく。	
			疾病の病因と病態実習	総論では、診断と治療に対する心構えを教授し、各種検査の臨床的意義と検査結果の理解の仕方・合理的な治療方法を学習する。さらに、分子生物学・遺伝子工学が飛躍的に進歩し、再生医療・分子治療が臨床応用されている。このような現況も踏まえ、最新の医療に対する基礎的知識も修得する。 次に循環器、呼吸器、代謝などの代表的な疾患を取り上げる。各疾患について、成因と病態生理について理解し定義、症状、検査法、診断・鑑別診断、経過と予後、治療方法について学習する。	
			内科学Ⅰ (総論・循環・呼吸・代謝)	(概要) 内科学Ⅰで学習した総論の内容を踏まえ、消化器、泌尿器、免疫系、感染症などの代表的な疾患を取り上げる。各疾患について、成因と病態生理について理解し定義、症状、検査法、診断・鑑別診断、経過と予後、治療方法について学習する。また、内科学Ⅰで学習した分野の疾患も含め、各種内科疾患についての知識を整理すると共に症候から鑑別診断・確定診断へと至る思考のプロセスについて学習する。また、各疾患についての小児の特異性についても学習する。  (オムニバス方式／全15回)	オムニバス方式
		内科学Ⅱ (消化・泌尿・免疫・小児科)			

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害と予防	神経内科学	神経内科では、脳・脊髄・末梢神経・筋肉の障害によって起こるさまざまな疾患について学習する。高次脳機能、脳神経系、運動系、感覚系、自律神経系など人体の構造や人体の機能で学習した知識を基盤として、脳神経・筋疾患の病態、診断、検査、治療について総論・各論を学習する。また、脳血管障害、神経変性疾患等の代表的な疾患について、実際の症例に基づいて学習し、鍼灸治療や理学療法における注意点についての理解を深める。	
			脳神経外科学	脳神経外科学では、人体の構造や人体の機能で学習した神経の構造や機能に関する知識に基づいて、その異常によってもたらされる病変の外科的治療法について学習することを目的とする。脳・脊髄および末梢神経に関する解剖・生理の知識を再確認し、神経学的診察法を身につけ、部位診断及び高位診断に関する知識を習得する。また各疾患についての画像診断（CT、MRI、血管撮影、など）や補助診断（脳波、誘発電位など）の読影についても、事例に基づいて解説する。	
			整形外科	整形外科とは、運動器に生じた疾患を取り扱う臨床医学の1学問分野である。歴史的には小児の変形矯正を扱う外科学の1部門であったが、その後分岐独立した。対象は神経、筋(骨格筋)、骨・関節、変形などその疾患は多岐にわたっている。ここでは、各組織・器官の基本的な知識とそれらに生じた疾患の主たるものについて論じ、それらの機能回復時の対応についても教授する。	
			整形外科診断学	整形外科診断学では、多種の整形外科疾患に対応するための骨・軟骨などの筋骨格系基礎理論とともに、整形外科の中でも専門分化した腫瘍外科、関節外科、脊椎外科、手の外科、スポーツ外科、小児成長外科、リウマチ外科および外傷学について習得することを目的とする。また、工学、理学系科学との学際的研究や、最近の基礎医学の分野の著しい進歩の筋骨格系への応用についても学習し、医療の高度化による診断・治療技術の進歩や疾患の概念の変化にも対応できるように学習を進める。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害と予防	感覚器の医学	<p>感覚器の医学では、眼科系、耳鼻科系、皮膚科系について基本的な知識を身につけることを目的とする。</p> <p>眼科系では、眼がきわめて微細な構造をして精密な機能を有する器官であることを認識し、眼科固有の疾患および他臓器と関連する眼疾患を理解する。</p> <p>耳鼻科系では、耳科学・鼻科学・咽喉頭科学および頭頸部外科学に関して、初期医療に必要な基礎的な知識の習得や診療技術について理解する。</p> <p>皮膚科系では、主要な皮膚疾患の病因と病態、検査と診断、治療ならびに内臓病変との関連を理解する。</p>	
			外科学	<p>外科学では、外科系、麻酔系、救急救命医療について基本的な知識を身につけることを目的とする。</p> <p>外科系では、機械的損傷、非機械的損傷、感染性疾患、末梢血行性障害、腫瘍などについて扱い、疾患を系統的に理解する。</p> <p>救急救命医療では、心肺蘇生法、ショック、呼吸管理、中心静脈栄養、輸血法、救急処置、ICUの役割などについて理解する。</p> <p>麻酔系では、各種麻酔法、患者管理、疼痛管理、神経ブロック法などについての基礎的な知識を身につける。</p>	
			心と体の発達の医学	<p>心と体の発達の医学では、精神医学系、婦人科系、小児科系について基本的な知識を身につけることを目的とする。</p> <p>精神系では統合失調症、気分障害、てんかん、薬物依存、精神療法などについて、疾患を系統的に理解する。さらに、意識障害や頭痛などについても学習する。</p> <p>婦人科系では、女性特有の生理機能を理解し、症状や疾病の病態生理や治療法について学習する。また、妊娠、分娩についても学習する。</p> <p>小児科系では、胎児期より、新生児期、乳児期、学童期、思春期と成長と発達に対する知識を深め、成人となるヒトにおいて、常に成長、発達し</p>	
			リハビリテーション総論	<p>本科目では、リハビリテーションの理念と生活の質(QOL)を高めるためのリハビリテーションの必要性、リハビリテーションの対象である障害の意味、評価、治療手段について理解させる。またリハビリテーションの種類として医学的リハビリテーション、職業的リハビリテーション、教育的リハビリテーション、社会的(地域)リハビリテーション等について学習すると共にチームにおける他の専門職種の役割および職務と相互の連携によるチームアプローチを理解する。</p>	



科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害と予防	リハビリテーション各論	リハビリテーション総論で得た知識をもとに、はり師きゆう師が理解すべき医学的リハビリテーションの運動療法、物理療法、日常生活用具、義肢装具、作業療法並びに言語訓練等の治療手段および医学的リハビリテーション対象となる疾患について、その原因、症状、合併症についてリハビリテーションテクニックを実技を交えて指導する。ことに脳卒中、パーキンソン病、脊髄損傷、脳性麻痺、進行性筋ジストロフィ症、切断、末梢神経損傷、慢性関節リウマチ、各種整形外科疾患、心疾患、呼吸器疾患について重点的に指導し理解させる。	
			スポーツ医学	スポーツ医学とは、スポーツ活動による生体の一時的、持続的な反応について医学的な面から考究する学問と考えられる。したがって、その対象範囲は広範に及ぶが、ここでは、将来必要とされるであろう (1)スポーツ外傷・障害の予防と処置、(2)スポーツ復帰のためのリハビリテーション、に主眼を置き教授する。また、“ヒトの進化とスポーツ医学”といった面から人体の有利な点、不利な点を論じ、なぜその部位にスポーツ傷害(外傷・障害)が頻発しやすいのかについても論じる。	
			老年医学	老年医学では、加齢に伴う様々な生理学的変化を加味した疾患について学習する。社会の高齢化に伴い老年医学は医学の分野のみならず社会的にも重要な位置を占めている。学習目標とすべき知識量は膨大であるが、老化の機序、老年者における生理学的変化、さらにそれらを踏まえた老年症候群・老年病治療学を学習し、老年病診察に必要な技術を概念的に取得することを目標とする。さらに老年者の介護・福祉の実際から最新の分子生物学による先端医療まで幅広く多面的に講義する。	
	専門科目	鍼灸基礎学	基礎はり実技 I	はり師に必要な鍼による基本実技を知り、正確かつ安全に身体へ施術することができるよう知識・技能を学習する。具体的な到達目標として、①刺鍼の手順やその意味を説明し、実践できる、②身体各部の解剖学的構造を理解し、正確な位置を指示できるなどがある。刺鍼の方法は、まず鍼枕(綿を詰めた布製の袋)に練習し、基本操作を学ぶ。人体への刺鍼は、鍼枕上で基本操作を十分練習した段階で、自身の下腿や学生同士での練習を行う。また知識や技術だけでなく、患者に対する適切な態度や配慮についても併せて教授する。	複数教員による共同担当

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸基礎学	基礎はり実技Ⅱ	基礎はり実技Ⅱは、基礎はり実技Ⅰで得た知識をもとに身体各部の刺鍼を行う。身体各部は下肢部、項部、腰殿部、側胸部・腹部、肩部・肩甲間部、頭顔面部と分類し、各部位での刺鍼を行う。具体的な到達目標として、①消毒を含めた刺鍼の手順を実践できる、②身体各部の解剖学的構造を理解し、体表指標から刺鍼部位を指示する。③身体各部の刺鍼によるリスクを理解する。身体各部の刺鍼がすべて終了後、身体解剖学的構造物に鍼尖を当てる特殊鍼法や毫鍼以外の鍼や他の器具を利用した各種鍼法を実施する。	複数教員による共同担当
			基礎きゅう実技Ⅰ	きゅう師に必要な灸による基本実技を知り、正確かつ安全に身体へ施灸することができるよう知識・技能を学習する。施灸技術に習熟するには技術の鍛錬・研鑽が必要大切である。艾から艾しゅ（形状は三角すいで大きさは米粒大）を作る方法を学び、形状と大きさが均一の艾しゅを連続作成できるようにする。作り方によって燃焼温度が上下することを理解し、燃焼温度が高くない艾しゅの作成技法を習得する。施灸は施灸板といった代用物による施灸から始め、習熟した上で自身の下腿や学生同士に施灸を行う。	複数教員による共同担当
			基礎きゅう実技Ⅱ	基礎きゅう実技Ⅱは、基礎きゅう実技Ⅰで得た知識をもとに身体各部の施灸を行う。艾しゅ作成の習熟度に応じて、施灸板と人体への施灸を練習する。施灸板への艾しゅの作成は意識して燃焼温度が高いものと低いものを各々連続して作成する。設定した燃焼温度から誤差の少ない艾しゅを連続して作成することができるように訓練をする。身体各部の構造的特徴、施灸方法と注意点を理解し、実践する。施灸の簡単な部位から行い、技術の向上に沿って施灸が困難な部位を実施する。身体各部の施灸終了後、無痕灸や特殊灸法を実施する。	複数教員による共同担当
			経絡経穴学概論	「経絡」とは気血栄衛の運行する通路と考えられている。いくつもの経絡が体内の臓器や体表をめぐっており、身体に異常があれば経絡に変化が起こると考えられている。経絡経穴概論では十二経絡と八奇経十五絡脈、経筋、経別の意義と流注を学習する。また、手の太陰肺経、少陰心包経、厥陰心包経、陽明大腸経、太陽小腸経、少陽三焦経、足の太陰脾経、少陰腎経、厥陰肝経、陽明胃経、太陽膀胱経、少陽胆経と任脈、督脈上の経穴についてはその名称、部位、解剖学的特徴、等を学習する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸基礎学	基礎経絡経穴学演習	本演習では、経絡経穴学概論で学習した経絡・経穴について、十二正経の走行を理解し、正確に経穴部位を取穴し、治療点として活用できるよう演習をおこなう。正経十二経脈についてはそれぞれの経絡ごとに取穴する。取穴に際しては骨度法や同身寸を理解すると共に、基準となる骨、筋腱、動脈拍動部などを学習し、経穴の正確な部位が特定ができるよう学習する。また、経絡の走行を確認し、治療に応用できるよう演習する。経穴部位については、それぞれ異なった特徴があることを理解するため多くの人体への取穴を経験し、どのような個体であっても、病態	
			東洋医学概論	東洋医学の基本概念である気血思想、陰陽五行説、臓腑経絡説、天人合一説を概説する。病理思想としての病因・病理論、気・血・水の病理、三毒説を理解し、漢方・鍼灸の差異を認識して八綱弁証などの概念により病態を把握する。診断・症候認識法として随証理念、四診法、脈診・腹診・背診・切経の概要を認識する。東洋医学の人体構成論を理解して、臓腑の機能的認識、経絡の流注や経穴を概説する。鍼灸治療の法則としての補法・瀉法や要穴の意味等について理解・習得する。	
			経穴局所解剖	経穴局所解剖は、経絡経穴学概論の知識を踏まえ、経穴を局所解剖学的見地から三次元的に考究する。刺鍼時の安全性を確保したり解剖学的構造物に着目した特殊鍼法を学ぶ上で不可欠な知見である。具体的には、経穴を体表指標構造との関連においてその位置を特定し、つぎに体表より順を追って深部解剖構造について、皮下組織、神経系、脈管系、筋、骨、内臓などどのような組織が存在するかを学ぶ。また、特定の解剖構造に刺鍼する技術として、体表指標構造と深部構造との位置関係を学ぶ。	
			応用経絡経穴学演習	本演習では、経絡経穴学概論・基礎経絡経穴学演習で学習した経絡経穴について、それぞれの要穴、主治、穴性を学習し、診断・治療に応用できるよう演習する。さらに、十四経脈に属していないが臨床重要で繁用されている奇穴について、それぞれの取穴部位、局所解剖、主治を学習し、臨床に応用できるよう演習する。また、治療点として従来から用いられるモーターポイントやトリガーポイントは、経穴部位と一致することが多い。そこで同部位の局所解剖を学習することで現代医学的観点から、経穴への鍼灸刺激に応用できる能力を涵養する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	鍼灸基礎学	基礎鍼灸学は鍼灸施術とその治療効果を、科学の目で観察し、そのメカニズムを論理的に考察する能力を養うことを目的とする。鍼灸治療効果の研究は刺激生理学分野、自律神経・内分泌分野、炎症理論などがあるがそれぞれの研究論文を教材に最新の知識を教授する。また、鍼鎮痛特に内因性モルヒネ物質や中枢神経における下行抑制のメカニズムやストレス学説・レイリー現象等の関連学説も概説する。	
		東洋医学各論	東洋医学概論で学んだ、気の世界・天人相関説・陰陽五行説に根ざした整体観・生命観・心身論（臓腑経絡説）・病因病理および治療理念（弁証論治）を実践でどのように生かすべきかを学習する。特に経絡病証（是動病・所生病）や穴位効能（穴性）に着目し、選経・選穴の原理・原則を習得する。その上で、東洋医学的な分類における内科（循環器系・呼吸器系・消化器系・泌尿器系・神経系・免疫系・内分泌系など）・整形外科・産婦人科・小児科・眼科・耳鼻科・歯科などの代表的疾患に対する病態観察法および鍼灸施術法の認識を深めていく。	
		現代医学系評価学	現代医学系評価学は、運動器系を中心とした臨床に必要な病態把握の判断としての理学的検査を中心に、身体計測法、関節可動域計測法、徒手筋力検査法、反射検査法、知覚検査法等について各種検査法の意義、目的、方法、陽性所見、注意事項等の基本的な身体所見の取り方とその臨床的意義を教授する。また、観察（診察）事項を記録することの重要性から、医療面接、カルテ記載法についても学習する。	
		東洋医学系評価学	東洋医学概論・各論で学んだ、生命観・心身論（臓腑経絡説）・病因病理および治療理念（弁証論治）を基に東洋医学系評価学を展開する。基本的な診察法である望診、聞診、問診、切診の情報の整理を行い弁証を行えるように学習する。特に切診である脈診、腹診や問診からの情報を中心に総合判断を行うことを学ぶ。八綱弁証、経絡弁証、臓腑弁証を理解する。また、経穴の特性を利用し、より効果的な治療法の選択や予後の判定を行う。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	鍼灸診断治療学Ⅰ（運動器・神経系領域）	<p>（概要）</p> <p>鍼灸診断治療学Ⅰは運動器、神経系のうち鍼灸臨床において頻繁に遭遇する症候について、診察から治療までの一連の作業をシミュレーションを交えながら、検査手法を駆使し病態把握を行い、得られた情報から治療方針を立てることができ、効果的な鍼灸施術を施す能力を獲得する。</p> <p>（オムニバス方式／全30回）</p>	オムニバス方式
		鍼灸診断治療学Ⅱ（内科領域）	<p>（概要）</p> <p>鍼灸診断治療学Ⅱは内科領域のうち鍼灸臨床において頻繁に遭遇する症候について、診察から治療までの一連の作業をシミュレーションを交えながら、検査手法を駆使し病態把握を行い、得られた情報から治療方針を立てることができ、効果的な鍼灸施術を施す能力を獲得する。</p> <p>（オムニバス方式／全30回）</p>	オムニバス方式
		鍼灸診断治療学Ⅲ（東洋医学領域）	<p>鍼灸診断治療学Ⅲは東洋医学領域の診断学を学習する。東洋医学概論、東洋医学各論で学習した内容に基づき弁証し治療につなげる能力を養う。患者の症状や徴候を、施術者が望診（視覚）・問診（嗅覚・聴覚）・問診・切診（触覚）によって集積し（四診合参）、それらに基づいて病能を把握し（弁証）、治療の方針を見定める（論治）ことを日常的に遭遇する症候を取り上げ学習する。特に切診や体表観察の重要性についても学習する。</p>	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸臨床学	(概要) 鍼灸診断治療学Ⅳは眼科領域、耳鼻科領域、皮膚科領域、小児の疾患、婦人科領域で鍼灸臨床において頻繁に遭遇する症候について、診察から治療までの一連の作業をシミュレーションを交えながら、検査手法を駆使し病態把握を行い、得られた情報から治療方針を立てることができ、効果的な鍼灸施術を施す能力を獲得する。 (オムニバス方式／全15回)	オムニバス方式	
			鍼灸症候学	鍼灸症候学では、症候・疾病に対して、現代医学的立場から、鍼灸治療の適不適について判断する能力を養う。また、東洋医学的な立場から、病因弁証能力及び臨床応用を養い治療目的に応じた選穴や配穴ができ、説明できるように学習する。さらに、臨床現場でよく取り扱われる症候・疾病を例に、東洋医学と現代医学それぞれの特性を理解し、総合した鍼灸治療の実際を学習する。	
			鍼灸健康学	鍼灸施術には古来より疾病の予防的効果があるとされ、伝承されてきた施術方法が多数ある。本科目では、施術の効果や作用機序がどこまで解明されているかも含め、健康増進や生活習慣病の予防的施術方法および疲労回復、睡眠促進、血圧調整、体重調整などについて学ぶ。特に肥満については、生活習慣病の初期徴候として重要であり、鍼灸の痩身作用についてその効果や作用機序および肥満に対する施術方法、評価法、鍼灸治療の適応と限界などについても学習する。	
			鍼灸老年学	老年者特有の疾患について現代医学と東洋医学の観点から学び診断及び治療法を習得する。老年者特有の疾患は次の4つに分類される。1は痴呆症、精神不安などに代表される脳神経機構傷害、2は歩行障害、骨折等による運動機能障害、3は虚血性心疾患、心不全、腎不全、腫瘍などの臓器障害、4は眼疾患などの感覚器傷害に分類される。それぞれについて鍼灸治療の適応を判断、老人のQOLの向上やリハビリテーションに貢献する能力を習得する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	鍼灸婦人小児科学	(概要) 鍼灸婦人小児科学は産婦人科・小児鍼灸学を学習する。  (オムニバス方式/15回)	オムニバス方式
		鍼灸免疫学	免疫応答は、細菌やウイルスなどの外敵だけでなく、体内に出現した癌細胞を排除するという働きを担っている。鍼灸治療は免疫応答に影響を与え、その働きを活性化することにより、身体の防御能を増強させることが、鍼灸臨床や基礎研究等で報告されている。鍼灸免疫学は、鍼灸臨床において遭遇する免疫応答に関わる疾患に対し、実際の臨床に即した診察、検査を通して、診断の組み立てや治療方法についての知識、技能、態度を身につけることを目標に教授する。	
		社会鍼灸学	鍼灸医学は東洋医学の一部として、中国・日本と長い歴史の中で発展してきた医療で、疾病治療のみでなく健康の保持増進などの分野にも広く国民貢献している。さらに国民医療として発展するために、現代のはり師きゆう師は、単に治療法を習得するだけでなく、現在の患者や医療をとりまく社会環境を十分に理解、認識する必要がある。社会鍼灸学では複雑な社会に生活する患者とのコミュニケーション形成を主体にし、医療面接技法を活用し、患者を取り巻く社会環境を浮き彫りにすることにより現代社会における鍼灸医学のあり方を考察する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	鍼灸応用学	<p>(概要)</p> <p>日本の鍼灸は、日本の風土により他の国の鍼灸と違った独自の発展を遂げている。 それぞれの流派は独自の理論を持ち治療体系を築いてきた。 応用鍼灸治療学では、数ある流派の中から、独自の理論や技術を発展継承してきた流派、新たな立場で治療体系を構築した流派を紹介し臨床に応用できる力を育成する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
		特殊鍼灸治療学	<p>鍼灸治療の適応範囲を理解しながら現代医学、東洋医学の両面から病態の把握、鍼灸治療の適否、予後を難病指定疾患を例に学習し、それぞれにつき、治療計画の立案から実施までを行えるよう教授する。また、特殊鍼法の概要を理解し、応用できる能力も教授する。取り上げる難病指定疾患としては、ネフローゼ症候群、スモン病、メニエール病、パーキンソン病、バージャー病などがある。特殊鍼法としては、洞刺、神経叢刺鍼、星状神経節刺鍼、刺絡鍼法などを教授する。</p>	複数教員による共同担当
		スポーツ鍼灸学総論	<p>はり師きゆう師に必要なスポーツ医学の基本を理解するとともに、スポーツによる傷害の予防法・治療法だけでなく、臨床に必要な診察の進め方、アスリートのコンディション、パフォーマンス向上についての知識・技術の修得およびスポーツ外傷の応急処置を教授する。また、これからの高齢社会、余暇社会を視野においた時代的な要求に応えられる幅広い知識を深めるため、スポーツ活動が身体にどのように影響するかといった基本的事項等も学習する。</p>	



科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸応用学	スポーツ鍼灸学各論	スポーツ傷害を中心に、スポーツ傷害に対して更に専門的観点から臨床に応用できるように教授する。講義によって臨床に必要な事項について理解を深め、さらに実習によって診察・治療技術を習得する。内容として、全身各部位のスポーツ傷害に対し、その原因、症状をもとに患者の局所的症状および総合的症状に対する基本的な診察と治療が行える能力を習得する。また、コンディショニング、テーピング法などについて主な疾患等を提示し具体的に教授する。	
			介護学概論	介護は、病気や障害、老いのために身体上又は精神上的の障害により日常生活を営むことに支障が出てきた者の生活の質を高め、自己実現を図るために援助することである。介護学概論では、介護の意義と障害のある人や高齢者における介護の役割を理解し、介護に関する基礎的な知識と技術を習得する。特に介護に必要な福祉機器の理解と介護保険や自立支援法等の社会保障制度上の介護について知識を深める。	
			鍼灸科学概論	鍼灸の科学的根拠となる理論と考え方について学習させる。まず、実験医学および臨床医学の基盤となる科学的思考様式について概説し、医療において客観性・再現性・論理性・普遍性が重要であることを理解させる。次いで、解剖学、生理学、免疫学、臨床医学、臨床疫学などの理論と手法を用いて鍼灸の有効性・安全性・作用メカニズムを科学的に説明しようとしてきた研究の動向を概観する。具体的には、鍼灸の基礎知識、安全管理、治効メカニズム、臨床試験などに関する研究成果を紹介し解説する。	
			鍼灸医学演習 I	鍼灸医学演習では臨床現場と4年間の学習において修得したことの関連をより強固にし、医療現場に直結した教育形態で授業を行う。 臨床医学演習 I では問題解決能力の育成を目的に演習を行う。臨床現場でよく遭遇するテーマを設定し、医療面接などの手法を用い患者とのコミュニケーション能力形成方法を学ぶ。また、施術者の倫理を具体的なケースを想定し考える。解決困難な課題を社会問題から抽出しそのテーマをグループで考えるなど施術者としての問題解決能力の育成を目指す。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸応用学	鍼灸医学演習Ⅱ	鍼灸医学演習では臨床現場と4年間の学習において修得したことの関連をより強固にし、医療現場に直結した教育形態で授業を行う。 臨床医学演習Ⅱでは人体各器官の正常構造と機能、病態、診断、治療の関連について具体的症例をあげ演習する。本演習は人体の構造や機能の理解が如何に治療に役立つかを再認識させることを目的とする。鍼灸治療は診断即治療の考え方が根底にあるため、基礎医学が軽視される傾向がある。科学的思考を養うためには実際の症例を用いて基礎医学の重要性を理解することにより卒後の学習の動機付けを行う。	
			鍼灸医学演習Ⅲ	鍼灸医学演習では臨床現場と4年間の学習において修得したことの関連をより強固にし、医療現場に直結した教育形態で授業を行う。 臨床医学演習Ⅲでは全身におよぶ生理的变化、病態、診断、治療の関連について具体的症例をあげ演習する。 本演習では、免疫やアレルギー、成長と発達から加齢と老化、人の死に至るテーマで、実際の症例を基に演習を行う。全身におよぶ症状を取り上げることにより東洋医学的思考と西洋医学的思考の差異をより明確にし、お互いの長所短所を認識することを目指す。また人の成長から死に至る過程を学ぶことにより人間理解	
			鍼灸医学演習Ⅳ	鍼灸医学演習では臨床現場と4年間の学習において修得したことの関連をより強固にし、医療現場に直結した教育形態で授業を行う。 臨床医学演習Ⅳでは伝統医学が医療現場でより活用されるための問題点と課題について考える場とする。鍼灸施術は病院や診療所などでの位置付けが明確でない。鍼灸医学の特性を理解しその課題と問題点を法律も交え議論し明日の伝統医学の展望を考えることを目的とし演習を行う。	
			老年ケア演習	はり師きゆう師も高齢者の実態を知り、積極的なケアが必要である。また、鍼灸臨床においては高齢者や障害者に接する機会は少ないため介助・介護のあり方および方法の理解は重要である。そこで老年ケア演習では、ベッド、車イスの場合の介護方法と日常生活に必要な食事・排泄・入浴という三つのケアの手順や基本的事項についてシミュレーショントレーニングを交えながら教授する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸応用学	画像診断学	現代医学において、画像診断はさまざまな領域で多用されている。鍼灸臨床においてもX線画像、MRI画像、超音波画像などに遭遇することは少なくない。画像診断学では、各種画像診断法の成り立ちから特徴を理解し、画像の基本的読影方法を学ぶ。また、整形外科領域や内科領域、脳神経外科領域の症例を用い鍼灸治療の適不適や予後判断などに応用できる能力を養う。	
			ケアマネジメント論	ケアマネジメントを包括的に理解するとともに多様な場面でのケアマネジメントの独自性についても学習し、対象別、領域別実践されているケアマネジメントの事例を通して展開方法を教授する。また、利用者の介護ニーズを満たすために、ケアチームが協働、連携し適切なサービスを提供していくためのケアマネジメントとは何か、保健・医療・福祉の一元化のためのケアプランはどのように作成し、どのようにサービスを実施していくのか具体例の中から学習する。	
			関係法規	関係法規は、鍼灸師にとって必要な法的知識の取得を目的に教授する。特に鍼灸師の身分法である「あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゆう師等に関する法律」に対して詳細な法的検討を行うと共に、鍼灸師にとって必要と思われる医師法・医療法などの医療関連法規についても学習する。また、医療の法的・社会的側面を広い視点から考えることにより医療人としての常識を身につけさせる。	
			応用鍼灸治療学実習Ⅰ	四診法（望、聞、問、切）に基づき、多面的に病態を把握する上で、重要なことは臓腑経絡学を理解することである。この臓腑経絡学を臨床で応用するうえで不可欠となる診察法の種類や、その診察法の特徴および診断的意義を中心に学習する。また、伝統鍼灸でいう四診としての多面的観察の重要性を学ぶとともに伝統鍼灸として「不変の内実」（一筋の思想）を踏まえて各種診察法を解説するとともに、実技指導によりそれぞれの特色と診断的意義の理解を深める。	複数教員による共同担当

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	鍼灸応用学	応用鍼灸治療学実習Ⅱ	西洋医学が発達した現代であっても難病は存在する。難病は、さまざまに定義されることが多く鍼灸治療が奏効する場合も多い。本時では、難病の中でも、スモン、ベーチェット病、クローン病、潰瘍性大腸炎、全身性エリトマトーデス、悪性関節リウマチなどのいわゆる特定疾患に対する鍼灸治療の位置づけから治療までを学習する。また、患者の背景すなわち精神的負担、家族や周囲の負担などを理解した上で患者に配慮した鍼灸施術を実施できる能力を獲得させる。	
			応用鍼灸治療学実習Ⅲ	古典医学書の難経から発展してきた治療法を学ぶ。経絡治療は、望・聞・問・切（脈診を含む）の四診法により、その情報から病因・病理を考慮し、証決定を行ない、証に随った治療、随証療法である。本時では、特に難経六十九難または六十八難に則って証決定を行う能力や治療穴を選定する能力を獲得する。また、刺鍼技術により補瀉調整が自由に行えるように学習指導する。	
			応用鍼灸治療学実習Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>刺絡鍼法は黄帝内経、素問、靈枢に記載され古来より広く行われている鍼法の一つである。その治療効果は気血の鬱滞を取り去ることにより気をめぐらし経絡の機能を整えるものである。本実習では刺絡鍼法の基本技術、適不適の判断等を学ぶ。さらに井穴刺絡、細絡刺絡、皮膚刺絡を学習する。また、吸角を用いた刺絡についても学習する。それぞれの技術を内科疾患、婦人科疾患、眼科疾患、泌尿器疾患、救急医療に応用できるよう学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	卒業研究	3年から4年までの2年間において指導教員と研究テーマを定め、指導教員の指示で、大学教育の集大成として、これまで修得してきた研究に対する心構え、態度、研究に対する基本的知識に基づいて、学習期間中に実験・研究・調査、あるいは文献講読、症例研究など様々な方法を用い、卒業研究をまとめさせる。	複数教員による共同担当
		附属施術所見学実習	附属施術所において施術の現場を体感し、鍼灸臨床の概要を把握する。施設・設備および施術の見学によって、鍼灸臨床が実際にどのような流れで行われているのかを理解する。また、環境整備の補助を通して、鍼灸器具の適切な取扱い、消毒および滅菌処理、環境衛生管理、施術録の取扱い、防災対策などの基本を体得する。さらに、施術所内での身だしなみ、指導を受ける者としての礼節、患者への言葉遣いや配慮、個人情報保護など、医療従事者としてのマナーと常識を身に付ける。	複数教員による共同担当
		附属施術所基礎実習	附属施術所において問診と診察の補助を行うことにより、鍼灸施術を開始する前段階として必要な事項を学習する。教員の監視下で実践される患者案内・予備問診・予備診察などを通して、患者への応対、問診の要領、観察と所見の記録、運動器疾患などに関する病態の推察、鍼灸施術の適否の判断、施術録記載などについて、適切かつ標準的な技能を身に付ける。また、患者との対話や病状の観察を通して患者の苦痛を理解し、医療従事者としてのモラルと使命感を養う。	複数教員による共同担当
		附属施術所応用実習	附属施術所において施術業務に参加し補助することにより、鍼灸臨床の実践に即した知識と技能を習得する。問診・診察により病態を推察し、治療計画を立てて学生同士で討論したのち、教員による修正を受ける。また、決定した治療方針にしたがって行われる教員の施術を補助しながら、安全で効率のよい鍼灸施術の知識と技術を向上させる。さらに、施術後の問診や理学的検査の補助を通して、鍼灸の効果を客観的に評価し説明するための技法を学習する。	複数教員による共同担当

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群		学外見学実習	<p>学外見学実習は、病院や診療所、鍼灸院での見学実習を行うことにより附属施術所実習では得ることのできない緊張感や体験を通じ高い職業意識を育成することをねらうものである。その具体的実習内容は次のとおりである。</p> <p>①病院・診療所においては、今まで学んできた現代医学的診察・診断技法や治療の過程について、医師がどのように駆使し、活用しているのか、医学に関する基礎的な知識を深める。</p> <p>②鍼灸院においては、開業鍼灸師が行う鍼灸臨床の現場を見学する。今までに学習した知識と技術を応用し鍼灸臨床を適切に行うことが出来る技能を養うた</p>	複数教員による共同担当
	臨床実習			